Iwakura International Exchange Society

COM

岩倉市国際交流協会

第１００号

２０１９年１１月１日

こんにちは！岩倉市国際交流協会です！

COM１００号に寄せて

1992 年の 1 号から四半世紀、ついに 100 号発行のはこびとなりました。これまで会員の皆様に協会の活動・報告など紙面にてお伝えしてきました。協会が行政主体でなく、市民主体の草の根交流を行う団体として発足したので、何もないところから、手さぐりで、色々トライしながら、ここまで一つ一つ積み上げて歩んできました。ＣＯＭの思い出とともにいくつかのこぼれ話を紹介しましょう。

思い出せば、いろいろ ～協会こぼれ話～

Ｑ１：なぜ、ＣＯＭという名前？

ホント、この広報紙の名前をつけるの大変だった。「COM」は「communication」の頭の三文字をとったんだけど、決まるまでにすったもんだの右往左往。「国際交流」「協会だより」「いわくら国際交流」など、各自の思いを込めて、夜な夜な喧々ガクガク。メンバーは当時若かった。夜中の12時を過ぎても、どれも今ひとつしっくりこない、と。眠気と疲れに襲われてきた午前２時過ぎ、やっと「ＣＯＭ」に決定。そうして生まれた「ＣＯＭ」は100号までずっと続いてヨカッタです。

Ｑ２：当時の苦労は？

今はワードで版下原稿を作っていますが、開始当時は原稿用紙に書いてもらった原稿を字数・行数を数えて割付用紙に配置して、イラスト、文字フォントを決めて、大橋印刷さんへ。できばえがイメージと違うと、その都度、大橋印刷さんに足を運び、手直し。今日では、データでのやりとりでずいぶん手間が省けるようになりました。

いんふぉめいしょん
Iwakura International Exchange Society

Ｑ３：ＣＯＭの多言語による姉妹バージョンがあった？

ごみの分別収集などが市広報に掲載されていましたが、日本語が読めなければわからないよね、ということで、行政のお知らせなども含めて、日本語・英語・中国語・ポルトガル語（スペイン語）による**「いんふぉめいしょん/ information / 岩倉消息/ informacion」**という情報紙を作成しました。4カ国で情報量も多く、翻訳チェックも大変！（翻訳ソフトなんてない！）結局、担当者の産休とともに、休刊中。

Ｑ４：サッカーチームも結成してた？！

イラン、インドネシア、ブラジル、ペルーそして日本人によるチームで市民球技大会、フットサル大会に参加していました。練習は毎週日曜日の午後。岩倉市民体育祭にも参加してました。

Ｑ５：ホームステイの「こいのぼり作り」は人気だった！

こいのぼり作りは、協会の発足以来、JICAや名芸大をはじめとする留学生がホームステイした時に、中島屋幟店の松浦さんのご協力で続けてきました。真っ白な生地から各自それぞれ個性豊かな鯉のぼりができあがりました。今も思い出となって世界のどこかの空で泳いでいるなんて思うと素敵です。

残念ながら、現在、ホームステイは行っていますが、こいのぼり作りの体験は行っていません。

日本語ひろば「岩倉」を支える人たち

まちを歩いているといろんな外国語が聞こえてくる時代になりましたよね。協会も外国籍の人に日本語を教える教室を開いています。そのはじまりは協会発足して２年目の1994年、岩倉や近隣に住む外国人が集まって「自由におしゃべりしながら、気楽に日本語の日常会話ができる場があるといいね」と始まった**〈日本語でしゃべろう会〉**。その後、しばらくして、おしゃべりだけでなく、きちんと「日本語を勉強したい」という外国人の皆さんの声に応えて、2004年に**〈日本語ひろば「岩倉」〉**が月２回でスタートしました。現在は月４回、水曜日の午後７時半から９時まで生涯学習センターで開かれています。ブラジル、ベトナム、フィリピン、中国など20カ国以上の方が日本語を学び、巣立っていきました。彼らにボランティアで日本語を教えるスタッフの声を少し聞いてみましょう。

日本語日常会話、日本語能力試験対応など、学習者の希望に応じて、１対１やグループでの勉強方法は開設当時からずっと変わっていません。学習者の出身国は経済状況や時代の流れによって変わり、人数の増減もあり、大変ですが、全力投球しています。（Ｓさん）

日本語を教えることに興味があり、ライフワークとしてお手伝いできるのなら、と思い、開設時から参加しています。日常使っている日本語を教えることの難しさを実感しています。（Ｙさん）

何かボランティアをしてみたかった時、市の広報をみて「外国語がしゃべれなくても OK」というのをみて、やってみようかな、と思いました。日本語を一生懸命勉強している姿を見て、一緒に学んでいる感じです。（Ｆさん）

会社の同僚の家族にフィリピンの方がいらしたのですが、その方が一生懸命、日本語を聞き取り、大学ノートにメモをとり、日本語を身につけようとしていました。その姿を見て、日本語しかできない私でも何かお手伝いができるかなぁと思い、参加させていただきました。近所にブラジルの女の子がいて、毎朝手を振っていたら、「オハヨー。」と挨拶し合えるようになり、うれしかったですね。（Ｏさん）

日本語の学習を支援するボランティアスタッフを募集中。　問合先：櫻井（090－8320－9591）

▷▷日本語を学びたい人、教えている人そして英語をしゃべりたい人も◁◁

外国籍の人が日本語を学ぶ機会だけでなく、日本人も外国語を話そうよ。そこで、2015年７月、英語をしゃべりたい人も集まればいいじゃん、と「英語をしゃべろう会（English chat　salon）」が始まりました。毎月第１月曜日の夜、生涯学習センターで、英語を使っておしゃべりしたい人たち（日本人のみならず）が集まってきています。

問合先：岩田（090－8457－3997）

「人に会う旅」・・・フィリピン・ピナトゥボの“と・も・だ・ち”

フィリピン・ルソン島の休火山ピナトゥボが噴火したのは1991年の6月。その年の秋、岩倉市で市制20周年記念の「で愛ふれ愛まつり」が開かれた。そこでのチャリティー募金をアジア保健研修所（AHI）の橋渡しで、ピナトゥボ火山の山頂付近に住む山岳少数民族アエタスの復興支援として贈ることになった。

協会としては、「贈る人、贈られた人」の関係ではなく「現地の人たちと友だちになりたい」と願い、翌1992年の秋、岩倉市民から送られた「鯉のぼり」数十匹と文房具を携えて、初の訪問団10人がフロリダブランカ市を訪れた。その時、受け入れに尽力してくれたのがAHIに研修生として来日していたフロリダブランカの保健所の若き医師、ボトンことDr.クユーガンであり、その訪問に同行してくださったのが当時の川原AHI所長でした。まだ火山灰が山積した道端の被災家屋で暮らすボトンの知り合いの家に一行は泊めてもらい、想像をはるかに超える歓迎を受けた。その時の誰もがこの訪問は支援の旅ではなく、「人に会う旅」だと感じた。

その後、大人だけでなく、小学5年生以上の子ども達も参加できるようになり、10数人から時には30人を超す訪問団として「人に会う旅」は続き、毎年、フロリダブランカ市を挙げて歓迎を受けた。

交流10周年を記念して、岩倉市民の寄付を基にグダ小学校の崩れた校舎を、図書館「THE IWAKURA LIBRARY TOMODACHI」として改築した。

一方、阪神大震災の際、ボトンから千円札1枚の入った封筒が届いた。「被災した友人に渡して。」と一筆。この千円は保健所に来る患者が5円、10円と持ち寄ったものとのこと。困ったときはお互い様。岩倉市民からの寄付100万余円を足し、神戸のNGOに届けた。

現在、「人に会う旅」は形を変え、春休みに大学生を1～2か月、現地の学校への派遣事業として続いている。　（内藤）

人生初の海外旅行は「人に会う旅」

訪問最終日、マニラのホテルでシャワーを浴びると耳からは泥水が流れ落ちてきた。40歳で初めて経験した海外旅行は、そんな旅でした。

台風で道路も川…

出発前にも伝染病や飲み水など心配なことばかり。家族も不安そう。心配ばかりしていても仕方がないと出掛けはしたが、暑く砂埃が舞う中、荷物が満載で足を動かすこともできないジプニーでの長時間の移動。手のひらも見えない暗闇の町で1人車から降ろされ、ホスト宅では大勢のフィリピーナに囲まれ英語や現地の言葉で話しかけられるが、混乱するばかり。

でも、1日、2日と過ごすうちにホストの家族はもちろんのこと、ホームステイしたグタの町の人々は、言葉が通じなくても心が通う近所のおじさんやおばさんになり友人となり、フィリピンへの旅は、仕事のことはもちろん家族のことも忘れる6日間となりました。

その後も、生まれ育った故郷へ帰るようにこの旅に参加しました。毎年、訪問団に参加する私の姿を見て、次男も「お父さんが嬉しそうに出かけるピナトゥボへ自分も行ってみたい」と3回続けて参加しました。彼もピナトゥボの水があっていたようだ！！

こんな体験に参加、経験できたことは、自分にとってほかに代えがたいものであり、家族にとっても忘れられない思い出となりました。　（古田）

〈岩倉市中学生海外派遣事業〉・・・岩倉市受託事業

派遣はオーストラリアから始まった

2004(平成16)年度から中学生海外派遣事業を市から委託され、協会で計画し、実施することになった。協会としては、成果が市民や次の年に伝わるようにする、英語研修だけでなく、人と出会い、人と交流することを大切にしたい、という思いだった。

そこで次のようにした。

① 参加者を10名から12名に増やす。
② 対象を3年生だけから、1･2年生まで広げ､3年生8人、1･2年生4人とする。
③ 学校推薦枠を廃止し、すべて公募、１次選考の後、抽選による選考とする。
④ 参加費を無料から、参加費３万円とする。
⑤ 市役所、学校の報告会以外に、一般市民向けの報告会を行う。
⑥ 研修会を英語中心のものから、交流中心のものへ変更する。
⑦ ホテル宿泊は無しにして、すべてホームステイとする。

訪問先はオーストラリアのブリスベンにあるヒルズ学園。ゴルフコースの中にある学校だった。門から校舎までの道すがら、野生のカンガルーが毎朝お出迎えをしてくれた。授業は、英語研修、ゴルフ研修、交流授業などがあった。子どもたちは、わからない英語に苦戦しながらも、ホームステイ先の家族とうち解けて、たった４泊しただけだが、別れ際には涙ながらにお礼を言い合う姿も見られた。　（三浦）

マレーシア派遣で見つけた自分～一歩を糧に～

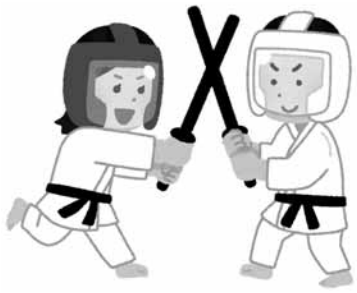
人生が変わるタイミングは、一歩踏み出したとき。僕のその”タイミング”は、中学生の頃でした。中１の時、マレーシアから友達の家にホームステイをしに来た子がいました。アマル君です。彼との出会いは僕にとって、初めての海外との出会いでした。それまでは、「日本が一番だ。海外なんて。」と言っていた生意気な少年でした。言葉が通じずとも彼と遊ぶことで有意義な時間を過ごせました。数ヶ月後、中２になった時、僕自身がマレーシアに行くチャンスが生まれました。それが中学生海外派遣団です。アマル君と遊んだことをきっかけに応募してみたのが、僕の”一歩”です。マレーシアで経験したことで海外への知見が拡がり、現在に至ってます。今、大学４年で就職活動において、海外で活躍できる業種を選択肢に入れています。

何が人生を変えるきっかけになるかは、誰にもわかりません。ただ、その一歩が未来を変えるかもしれません。自分は自身の経験した一歩を糧に、なんにでも挑戦することも覚えました。より人生が豊かになっている、そんな気がします。　（宮田）

実際に行動してみよう ～モンゴルに派遣で得た変化～

皆様はじめまして。７年前にモンゴルに行かせていただきました神馬です。現在は横浜で大学生をしています。さて、モンゴルと言われると何を思いつくでしょうか。草原？遊牧民？しかし、実際に行ってみるとコンクリート舗装の道路、林立するアパート、観光地化した遊牧民の家‥‥私の想像と全く違いました。自分を変えたいと思って参加した私は想像と現実のズレを目の当たりにし、実際に行動することの大切さを学びました。思い込みや先入観は正しいのか？実際に行動せずにその物事を「真に知る」ことができるのか？モンゴルに行ったことにより、常に疑問を持ちながらチャレンジするようになり、私の人生は大きく変わりました。

現在、私は大学で教職の勉強をしながら、スポーツチャンバラというスポーツをしています。チャンバラというと男子が休み時間に箒や新聞紙でやっているようなイメージではないでしょうか。私も初めはそう思いましたが、実際にやってみようという信念で参加し、このスポーツの楽しさ、素晴らしさを知り、今では大会に参加し、入賞出来るほどになりました。私は中学生の時にこの派遣事業に参加したことで得られた人生観によって充実した人生を送ることが出来ています。自分の人生に変化が欲しいと感じている方は、一度海外に赴いてみては、いかがでしょう。何が起こるかは行ってみないとわかりませんが、きっと何かしらの気づきや変化を得られると思います。（神馬）



～最高のホームステイ～ なにごとにもチャレンジ！

今夏、モンゴル派遣での僕のホストは、ガンボロル君でした。ニックネームは、ガンボ。実は、ガンボ君、７月に訪日した時に、僕の家にステイしました。その時、「モンゴルに来たら、必ず、我が家にステイ」と言ってくれ、その通り、ガンボ君の家にホームステイできました。

１日目は、ガンボ君の両親は仕事に行っていたので、ガンボ君と一緒に夕食を作りました。僕は、日本で夕食を作ることをしないけれど、ガンボ君はいつもお手伝いをしているようで、とても手際が良かったです。この日はモンゴル料理のボーズを作り食べました。

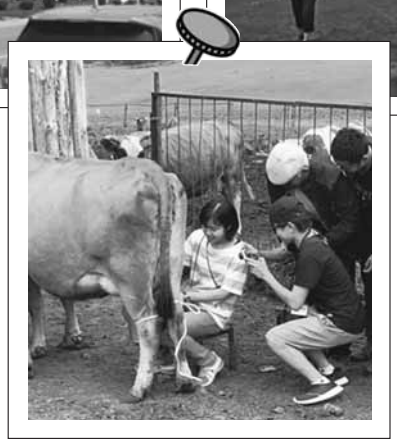
２日目は、９時から学校でした。学校が終わってから、車で１時間ぐらいの所にあるおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんは夕食に、羊の肝臓や胃などを出してくれました。僕は、いつも見た目で食べるか食べないかを判断していたので、羊の肝臓や胃は見た目が悪く、食べられないと思いました。しかし、勇気を出して食べてみたら、美味しかったです。“何事もチャレンジが大切”。ガンボ君の家族と過ごした３日間は、本当に楽しく、別れは本当に悲しかったですが、また日本で再会する約束をしました。（熊谷）

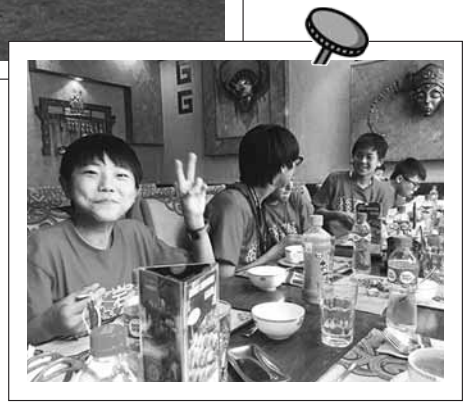
モンゴルへ行き、改めて己を思う

この８月２日から10日までの計９日間、派遣団の引率としてモンゴルへ同行しました。私自身、中学生の時に団員としてモンゴルへ行ったので、５年ぶりの訪問となりました。緑の広大な草原や牛が道路を横断する光景はかわらないものの、首都ウランバートルでは煌びやかなビルやショッピングモールが立ち並び、このギャップにモンゴルが発展しつつあることを実感しました。また、中学生の時には気づかなかったモンゴルの社会問題も目に入りました。例えば、地球温暖化により増加した降水量と側溝設備の不足、急激な人口増加や交通渋滞、それに伴う空気汚染、また、貧富の格差拡大やゲル地区の存在。そして私が驚いたのは、モンゴルの若者は自立心が強く、将来の夢に自国の発展を掲げる人が多いのです。事実、私のホストファミリーも父母だけでなく、高校生も今、モンゴルが抱える問題に対し、自分の意見をきちんと持っていました。日本の若者はどうでしょう。ニュースや新聞に関心がなく、選挙の投票率さえも低迷していると言われています。モンゴルの社会問題に対する若者の姿勢をみて、私も日本の抱える問題と向き合うことを意識するようになりました。新しい人や世界と出会う度に新たな自分に気づく、これが海外に行くことの醍醐味であると私は思います。

今回の中学生 14 人が、それぞれが異なる文化や習慣、伝統に接し、彼らにとってもまた、新しい自分の可能性と日本という国について改めて認識する貴重な経験になったのではないでしょうか。

（伊藤）





いわくら市民ふれ愛まつり

今年は“もちもち餃子”を出店します。ぜひ、ご賞味ください。

★日時：11月９日（土）10:00～16:00
　　11月10日（日）10:00～15:30

～岩倉国際交流フェス 2019 ～

♬みんなで楽しもう
音楽・ダンス・お料理！♬

★日時：11月24日（日）11:30～15:00
★場所：希望の家　（岩倉市川井町江崎3819-1）
★参加費：小学生以上200円（未就学児無料）
　ブラジルのサンバ、中国の踊り、ペルーの歌、昭和歌謡、オカリナ演奏、エルサルバドルの伝統料理「ププサ」とモンゴルの「ボウズ」を作って食べよう！

ププサって？トウモロコシ粉のお焼き

ボウズって？モンゴルの焼き餃子

世界のお総菜

２月に韓国の家庭料理を予定しています。ぜひ、ご参加を

会員継続手続き及び新規会員申込手続きのご案内

　事業は会員皆さまの会費と岩倉市国際交流事業補助金で運営されています。平成30年度も引き続き、会員継続手続きとして下記の口座へ会費のお振込みをお願いします。新規会員申込手続については、下記問合せ先にご連絡をお願いします。

会費振込先　いちい信用金庫愛北営業部　普通預金　１０１６３００
　　口座名義人　岩倉市国際交流協会　内藤和子
会　　費　１口1,000円とし、会計年度ごとに個人会員（家族会員）は３口以上、高校生以下はジュニア会員として１口、団体会員は10口以上です。
問 合 先　内藤（0587-66-7347）

会　報　ＣＯＭ第99号（2019年11月１日）　事務局　〒482-0021　岩倉市新柳町3-21-2（内藤方）
発　行　岩倉市国際交流協会　　TEL･FAX　0587-66-7347
印　刷　大橋印刷所　　HP：http://www.iies.info